

唐詩人の咆哮：任華の自薦と文学

著者	高木 重俊
雑誌名	中国文化：研究と教育：漢文学会会報
巻	50
ページ	78-90
発行年	1992-06-20
URL	http://doi.org/10.15068/00150110

唐詩人の咆哮

——任華の自薦と文学

はじめに

古来、仕進を冀う知識人にとって、「知己」「良媒」との出会い、自己の命運を左右する重大な関心事であったが、貢試の制度が整備された唐代でも、それは同様であった。彼らは権貴有力者の知遇を得るためにその門に近づき、宴席に侍り詩文を呈上して推輓の機を待つ。一方、権貴有力者にとって有能な知識人の発掘登用は、自己の権勢の拡大や「人を知る」という評価の獲得につながる。両者はそれぞれの思惑を秘めた売り手と買い手の関係なのであるが、売り手の商品たる「文」を買うか否かの決定権は全て買い手が握っているから、両者の力関係は歴然たるものである。権貴有力者にとって、推輓を期待する詩人群は塵

高 木 重 俊

芥にも等しい存在に過ぎない。とは言うものの、彼らとて「文」を負うて当世に睥睨する大志を抱く知識人である。無為無言のまま買い手市場から姿を消すことに頑強に抵抗する者も、唐代中期に現れた。自己の「文」への矜恃と所与の境遇との隔絶の大きさが、彼らの声高な発言を生むのである。

任華という人物もその一人である。彼は権貴に対する咆哮にも似た上書によって、後世「狂狷之流」と評される。⁽¹⁾

古来、「狂狷」は、時代の不合理や矛盾を尖鋭に突く者に付けられる冠詞でもある。「狂狷」なる任華がどのように時代に立ち向かい、時代がどのようにに彼に反応したかを見つめることは、その時代ならびに知識人の精神の一端を照射する手懸りともなる。これが小論の意図であり、任華を中心としながら、彼よりも先人である王泠然（六九三）

七二五)にも言及するものである。

一

任華の生卒年は不明である。彼の閲歴に關しても、彼が樂安(山東省博興縣)の任氏という寒族の出で、玄宗が肅宗の治世に秘書省校書郎となり、大曆十年(七七五)前後に桂州刺史・桂管防禦觀察使李昌巖の幕府の參佐となつて桂林に赴き、貞元四年(七八八)以前には長安に戻つてしたことぐらいいしか解らない。今に残る作品は、詩三首・賦一首・上書四篇・序十八篇・讚一篇の計二十四篇のみであるが、その著作活動は天寶六載(七四七)ごろから貞元四年ごろに至る四十余年にわたっている。彼はおそらく玄宗の開元年間の生まれで、安・史の大亂をはさみ、大曆の中興の時代を経て、徳宗の貞元年間まで生きたことになる。彼の四篇の上書は、王定保『唐摭言』卷十一「怨怒」の項に附載された「懸直」の条に収められ、権貴を憚ることのない直言によつて知られる。以下、その概略について語ることしよう。

「上嚴大夫牋」は嚴武(七二七～七六五)に上呈された文書である。嚴武は代宗の宝應二年(七六三)、七月に広徳

元年と改元)正月に、京兆尹兼御史大夫となつて成都から長安に帰り、夏秋ごろに京兆尹兼吏部侍郎となるまで御史大夫を兼任しているから、任華のこの「牋」は七六三年前半に書かれたことになる。

任華は冒頭「逸人」と名乗り、かつて秘書省校書郎であり、その後久しく嚴壑に隱居していたと述べたあと、嚴武に上書する理由を語る。

今者、輟魚釣、詣旌麾、非求榮、非求利、非求名、非求媚。是將觀俯仰、察淺深。何也、公若帶驕貴之色、移夙昔之眷、自謂威足凌物、不能禮接於人、則公之淺深、於是見矣。公若務於招延、不隔卑賤、念半面之曩日、迴親眼於片時、則公之厚德、未易量也。惟執事少留意焉。

任華が隱処から嚴武の前に姿を現したのは、嚴武の起居振舞いを觀察してその人柄の淺深を見極めるためであり、彼が「もし驕貴の色を帯び、夙昔の眷を移し、自ら威は物を凌ぐに足ると謂ひ、人に礼接する能はざれば」、それは淺薄な人間性の証明であり、「もし招延に務め、卑賤を隔てず、半面の曩日を念ひ、親眼を片時に廻らす」ならば、測り知れない厚德を示すことになるというのである。

そして任華は、君子は他人の美を成就させるもの、自分も土君子の一人として嚴公の美を成就させるために、「菓

石の言」を献上して蔽公の「膏肓の疾」を療やして差し上げましょうと前置きをして、本題に入る。

何者、當今天下有譏諫之士、咸皆不減於先侍郎矣、然失在於倨、闕在於怒。且易曰、謙謙君子、卑以自牧。論語曰、君子之道、忠恕而已矣。公之頃者、似不務此道。

非恐乖於君子。亦應招怒於時人。禍患之機、怨讎之府、豈在利劒相擊、拔戟相撞。其亦在於辭色相干、拜揖失節。

任華はまず、今日の天下の譏諫の士の言として、「蔽公は）先侍郎に減らないが、欠点は倨り怒ることに在る」という世評を示す。「先侍郎」とは蔽武の父の蔽挺之で、開元年間に刑部・吏部・中書各侍郎を歴任しており、『新唐書』本伝には「挺之 交游を重んじ、生死を許与して易へず、故人の孤女を嫁せしむること数十人、当時これを重んず」と記される人物である。蔽武はこの父に劣らぬ人材であるものの、倨りたかぶって怒りを露わにすることが欠点であると任華は指摘するのである。そして『易』『謙』卦の辞や『論語』『里仁』の句を引き、自らを卑くし忠恕を抱くことを君子たる者の使命であると述べたのち、「公の頃は、此の道に務めざるに似たり」と断じ、禍患・怨讎は劒戟で打ち合うことからでなく、言動の不遜から生まれるのだと続ける。

さらに、任華は、孫秀のために罪を獲た潘岳、鍾会の図る所となった嵇康の例を挙げたのち、

必能遇士則誠於倨、撫下則宏以恕。是可以長守富貴、而無憂危矣。成人之美、在此而已矣。念之哉。

と、倨傲を改め寛恕の心をもって人に接すれば、長く富貴の身を保持できると述べる。

任華が繰り返し倨傲を戒める蔽武とは、そもいかなる人物なのか、『旧唐書』本伝によって見てみよう。彼が上元二年（七六一）十二月に成都尹・劍南節度使として赴任したおり、かつて宰相として自分を給事中に抜擢してくれた恩人の房瑄が管内の漢州刺史に左遷されていたが、蔽武は房瑄に「驕倨」して礼を為さなかった。二度にわたる成都尹・劍南節度使としての職務遂行ぶりは、「志を肆にし欲を逞しくし、恣に猛政を行」い、「徵斂」を蔽にして「奢靡を極」め、蜀地を「既竭に至」らしめた。八歳で父の愛妾を撲殺し、節度使となつては意に副わぬ管内の刺史を杖殺するなど示される直情径行の性格は、軍事面においては好結果をもたらし、しばしば蔽武に敗北した吐蕃は、その威を恐れて国境を犯すことがなかった。彼の人となりは「性もと狂蕩にして、事を視ては多く胸臆に率ふ」と総括され、論贊では「狂夫」とも評される。蔽武はまさに権勢

を背に感情の赴くままに威令を行う人物なのである。

この嚴武に対して任華は「賤」を上呈し、彼の「倨」と「怒」の欠点を憚ることなく指摘し、それを改めて君子としての道を全うするよう忠告しているわけである。権勢を物ともしない任華の剛直の精神がこの「賤」の中に横溢していることは今さら言うまでもないが、この「賤」が、四六文の拘束を脱した自在なリズムと明快な言語によって書かれていることも、この時代には稀少である。

ところで、任華が嚴武にこのような内容の文書を上呈した、その意図は何であったのか。無位無冠の任華が、嚴武を國家の柱石と見込み、國家的見地に立つてその闕点の矯正を勧告したなどとは到底考えられないのである。

任華は「賤」の冒頭で、「自分は嚴壑に隠居し、宦情・世事はとうに忘れた」「嚴公の麾下に上書するのは名声や好意を求めていることではない」と述べてはいるが、嚴公に對しては、「夙昔の眷を移さない」「人に礼接する」「招延に務め、卑賤を隔てない」「半面の曩日を念う（昔日の交友を少しでも思う）」「親眼を片時に廻らす（一時でも親しみの目を向ける）」ことを、君子の取るべき態度として求めている。これらの言から、任華が嚴武と旧知であり、任華のこの賤は、嚴武に対して自己の存在をアピールし、自

己の推輓を請うものであることは容易に知られよう。

推輓要請を旨とする表現は、本人の個性や要請する相手、あるいは時代の風潮などの相違によって多面的様相を呈するが、権力者嚴武に向かってその欠点を倨傲に在りとし、謙虚に人材を礼遇せられよと忠告する裏に自己の推輓を要請する意を込めるこの賤は、決して尋常なものではない。「任華は一野客なるのみ。華の言を用ゐるもまた唯だ命なり。華の言を用ゐざるもまた唯だ命なり。明日は当に衣を払ひて去るべし。その他を知らず。」と述べてこの賤は結ばれるが、この結びは捨て台詞にも等しい。自分を任用できないならば君子ではないと言わんばかりの心意気を、剛愎なる権力者嚴武に叩きつけたのがこの賤なのである。

「才を恃み物に傲る」権力者に対する任華の怒りは、「告辞京尹賈大夫書」にさらに明白に表われる。これは京兆尹兼御史大夫の賈至（七一八～七七二）に対する訣別の書で、大曆五年（七七〇）三月から九月までの、賈至の在職中に書かれた。「書」の内容は、かつて任華の「陋巷」の居を訪問する約束をしたのであらう賈至に對して、その不履行を責めるものである。彼は天下の有識者の賈至評を引き、「君の才望は美なるは則ち美なるも、猶ほ闕けたる所

あり、その闕けたる所の者は、才を待み物に傲るに在るのみ」と、賈至の闕を指摘する。嚴武に対すると同じ手法である。そして、「君から国士として遇された僕は、国士として君に報いようと思う。報恩の内容は君の『恃才傲物』の欠点を補うこと。君は快く来たって僕の忠告を聞くべきなのに、ここ数日知らん顔をしている。」と続ける。これが任華の怒りの原因なのである。「意者^{おも}ふに、（君は）売^{さけうり}膠^{カウ}や博徒に従ひて遊ぶを取づる者ならんか」という詰問はまだしも、「今、君は馬蹄を惜しみて我を顧ざるがごとし（馬の蹄が減るのを惜しんで私を訪ねて来ない）」とは、賈至に悪態をついているに等しい。

賈至は『旧唐書』では「文苑」に立伝される人物で、詩人・文章家として名高く、李白・杜甫・独孤及らと交游唱酬^{（3）}している。彼が任華の言う「恃才傲物」の人であったか否かを確認する手だてはないが、約束を反故にされた怒り、とりわけ権貴を迎えるという期待を裏切られた、極めて個人的な怒りが、この書を書かせたのである。

「与京尹杜中丞書」は、京兆尹兼御史中丞の杜济に与えたものである。杜济は大暦五年（七七〇）九月、賈至を襲って該職に就き、同八年（七七三）五月、杭州刺史に左遷されるまで在任した。この書で任華は言う。人間関係は古

来困難なものであるから、自分は長安に至ってひたすら「孤介」を守り、権貴の門に近づくことを避けてきた。ところが先日、杜公が自分の文章を読んで名公大臣に吹聴して下さったことから、自分は杜公を知己^{しき}と思うようになり、杜公の門館を訪れて厚遇を受けた自分は、杜公を「永く貞吉を保ち、人と終始の分ある」お方であると確信した。そこで「前日 自ら料^{はか}らずして公に折^{おた}巧^{のみ}した」のであるが、色よい返事は得られなかった。

矧僕所求不多。公乃曰、「亦不易致、即當分減」。然必若易致、則已自致矣。安能煩於公。且凡有濟物之心、必能輟於己、方可以成濟物之道。公乃曰分減、豈輟己之義哉。

僕が求めたのは些細なことなのに、公は「致し易からず、分減すべし」と答えた。「分減」は、ここでは「分損」と言うに等しく、（要求を）下げる意。任華は、容易に出来るのなら公を煩わせるまでもなく自分でする、そもそも「分減せよ」とは、「己の食い分を輟^やめて人に分与する」義に反し、士大夫の「物を濟う道」に忤^もると憤激するのである。

さらに彼は、「況んや許さるるを蒙りてより、已に旬日を経たり。客舎にて傾聴するに、寂寞として声なし。公

豈に事の繁くして遺忘せらるるか、当に遺忘するに至らずして、以て閑事と為さるるか」と追い打ちをかけ、四方の地に居る者は信義を軽んじてはならぬと述べて、この書を結ぶのである。

杜済の人となりや任華との交遊関係は不明であるが、彼はおそらく任華からの任官要請を許諾しておきながら、十日も放置して連絡もよこさなかった。客舎にて吉報を待つ任華は、杜済の背信に激怒しているのである。

「与庾中丞書」は、大暦五、六年ごろ、中書舍人から御史中丞に移ったばかりの庾準（七三二～七八二）に対して、自分を推薦してくれるという約束を反故にされた怒りをぶつける書簡である。ここには任華に対する庾準の約束が、具体的な三点として書き留められている。

(一) 華自去多拜謁、偏承眷顧、幸以文章見許、以補發相期。衆君子聞之、當信矣。

(二) 華頃陪李太僕詣闕廷、公乃謂太僕曰、「任子文辭、可爲卓絕、負寃已久、何不奏與太僕丞。」

(三) 華嘗以三數賦筆奉呈、展手割云、「足下文格、由來高妙。今所寄者、尤更新奇。公言之次、敢忘推薦。」

右の記述から、任華が庾準にしばしば詩文を呈上して高く評価され、手厚い知遇を得ていたことがわかる。しかも

庾準は任華のために、補闕（從七品上）や太僕丞（從六品上）という具体的な職名まで口にしていたのである。しかし任華は官職にはありつかなかった。かくて彼は前述した書簡の場合と同じように、「華或不才にして、皆望む所に非ず。然れども公の相待するは、何ぞ前に緊にして後に慢なることは是の若きや。豈に華の才の前日より減りて、公の恩遇の玆の辰より薄からんや。」「朝廷は方に遺滞を振擧するを以て務めと爲す。中丞に在りては、今日、公言の次に非ざるを得んや。公言の次に當りて、曾て片言を以て及ぼさるるを聞かず。其の意を公にする者、豈に前日の信を棄つるを欲せんや。」と、庾準を難詰するのである。

庾準は兩唐書に簡略な伝を持つが、「準素より文学寡く、柔媚を以て自ら進み、既に儒流に非ず、甚だ時論の薄んずる所と爲る」（『旧唐書』本伝）と記されるように、評判の芳しい人物ではない。しかし、任華の文学を高く評価していたのは事実と思われる、一方、任華も庾準の推輓によって官職を得ることに強い期待を抱いていたのである。この書簡は、「野人任華は旧山に帰るが、自分に『機心』があつて庾公に対してかかる『扣撃』をしたのではない、ただ後進の者は公に囑望しているから、後進の望みに留意してほしい」と述べて結ばれるが、去り行く自分の後姿に

たっぷりと未練の思いを漂わせているのである。

代宗の広徳年間に成都に滞在していた杜甫に対して任華は「雜言寄杜拾遺」詩を贈り、その中で「我は飛ばず鳴かず亦た何の以ぞ、只だ朝廷に知己あるを待つのみ」と自己の窮境を訴えた。また大暦の末期、狂草によって京師に名を轟かせた懷素に対して、任華は「懷素上人草書歌」という讃歌を制作しているが、彼はその中で「爾に絶芸ありと雖も、猶ほ当に良媒に仮るべし」とうたい、懷素が世に出るに当たり、礼部侍郎張謂が良媒であったことを指摘した。⁽⁴⁾ 寒門出身の任華にとって、彼が官界に入るためには、朝廷内の「知己」懷素の場合のような「良媒」は必須不可欠のものであった。ここまで見て来た四篇の書簡は、知己・良媒を求めた彼の活動の帰結だったのである。

彼が知己・良媒に設定した人物は、剛愎の狂人嚴武であり、詩人・文章家として知名だった賈至であり、佞媚をもって出世街道を歩む庾準であり、およそその選択に基準があったとは思われないが、對嚴武を除く三つの書簡が大暦五、六年に集中して書かれているところを見ると、この時期、任華には特に仕官を急ぐ理由があったのかも知れない。彼が自らを売り込む、そのポイントは文学であった。

杜済・庾準はもとより、おそらくは賈至も、彼の文学を高く評価しているのである。しかし、文学によって貴人の知遇は得られても、それを一歩進めて、官職を獲得するには至らなかった。彼は常に相手の約束違反を詰ってその前から立ち去るのであった。これらの結末から考えると、任華は推輓・知遇を求める相手に対して、決して卑屈な接し方はしていないかたはずである。⁽⁵⁾ 用人の柄を握る権貴にも臆することのない彼の剛直の精神は、おそらく文学への自負によって支えられていると思われるが、それについては後章で述べる。

二

権力者に対して齒に衣を着せぬ物言いをする任華の四篇の上書は、唐文の中でも極めて特異なものであるが、こうした上書を書いたのは任華が最初ではない。開元年間前期に、王洽然（六九二〜七二四）が、すでにその先例を見せてくれている。以下、洽然の二篇の上書を瞥見しながら、王洽然・任華に共通して流れる士人の意識に触れてみる。王洽然の伝は『唐才子伝』⁽⁶⁾ 卷一に簡略なものがあるが、傅璇琮氏「校箋」は、出土墓誌「唐故右威衛兵曹參軍王府

君墓誌銘序」にもとづいて遺漏を大幅に補っている。それによると、王冷然の字は仲清、太原の人で、県令・県主簿の家系に生まれている。開元五年（七一七）に二十六歳で進士に及第、同九年に制科に及第し、将仕郎・守太子校書郎を授けられ、のち右威衛兵曹參軍に遷り、三十三歳で早世している。

「与御史高昌宇書」は、『唐摭言』卷二「悲恨」に収録されており、開元五年春に進士に及第した冷然が、その直後に高昌宇なる御史に書き送ったものである。「僕の君を怪しむは甚だ久し」と書き起こされるこの書簡は、昌宇に対する「不平之事」を述べ、彼の「短」を彰らかにしようとするのであるが、冷然の最大の怒りは、かつて先年間に参加した挙選において、昌宇に不合格にされたことにあつた。冷然は、「僕の枉落、豈に背て口を緘さんや。是れ則ち公の僕を激する、僕豈に知らざらんや。公の僕を辱むる、僕終に其の故を忘れず。」と昌宇に対して怒りをぶつけ、一方、「往者、公の不送を蒙ると雖も、今日亦た自ら青雲を致す。天下の進士に数あり、河より以北は、唯だ僕のみ。光華藉くこと甚だし、是れ知らずんばあらず」と自己の進士及第を誇る。そして「君は須らく稍か後恩を垂れて、僕の前恥を雪ぐべし」と述べて、貧窮の境にある自己の救済

を要求するのである。末尾に言う「君が援助を忘れるならば、やがて君と台閣に肩を並べる日に、僕は側眼をもって君を視るだろう。その時に悔いて謝っても、僕は君を心にも掛けずまい」とは、全く捨て台詞にも等しいが、御史を憚ることなき王冷然の強烈な気概はストリートに伝わってくる。

「論薦書」は約二千字に垂んとする長文で、開元十一年（七二三）に宰相張説に上呈された。冷然みずから書中に記すように、この書は最初に近年雨が少なく陰陽のバランスが崩れていることを論じ、中ごろに宰相として賢人を進めることに務めるよう願ひ、最後に登用を冀う冷然自身について述べるといふ構成をとる。

宰相とは天子を補佐して民の災苦を匡救するのが職務であり、陰陽不和・四時不順で天災の相繼ぐときは、賢者を推挙して交替し、潔く退くべきだ、というのがこの「書」の主旨であるが、その議論の調子は、

今 入室は磬を懸くるが如く、野に青草なし。……、
昨五月 恩ありて、百官 賜を受けたるに、公は官すで
に大なれば、物もまた多く有り、金銀器及び錦衣等、聞
くに公はこれを受けて、面に喜色ありと。今歳 大旱あ
り、黎人阻飢す。公は何ぞ金銀を固辞し、倉廩を賑はさ

んと請はざる。宝を懷き錦を衣るは、相公に於て安からんか。百姓は餓えて死せんと欲す。公は何ぞ賢を挙げて自ら代り、位を譲り帰るを請はざる。

というように、激越そのものである。『唐才子伝』に「氣質豪爽にして、言に当たりて回忌する所なし」と記される通りである。

「文章」ある者が「富貴」の地位に至るのは極めて正当なことであると王泠然は考える。それはあたかも、かつて崔融・李嶠・宋之問・沈佺期・富嘉謨・徐彦伯・杜審言・陳子昂らと「連飛並駆」し、相互に唱和しあった張説が、三度にわたって宰相の位に昇り、「貴は当朝に称せられ、文は命代と称せられ」ている現実が証明する。泠然が「公は一たび甲科に登り、三たび宰相に至る。是れ文章の用ゐらるるを得たるに因り、今に於て亦た三十年なり」と述べるように、富貴をもたらす文章の功用は絶大なのである。しかし、現今は文章に優れた者が正当に推挙される状況ではない。泠然に言わせれば、「今の吏部侍郎の楊滔は、目に字を識らず、心に賢を好まず」といった人物で、官吏の登用は「親・勢・賄・交」によって決まり、才行があつても「党・媒」のない者はただ「声を呑み気を飲む」しかない。そこで「富貴の功成り、文章の命遂げた」張説は引退

し、人心を一新して賢者の登用を進めるべきだと、彼はこの「書」で主張するのである。

書中に、「僕も亦た文章あり、公の見んことを思ふなり」と述べ、末尾で「この書を読まれた後の怒りが解けたとき、僕はこれまで書きためた文章を持って拝謁に参上します」と言うように、泠然は自己の登用を張説に願っているのであるが、彼は権貴に頭を低れ、辞を卑くしてその推挽を請うてはいない。それどころか、「僕用のあられんと思ふは、その来ること久し。拾遺・補闕に、寧ぞ種あらんや」とまで、傲然と言い放っているのである。書の内容からすると、泠然は、『岳陽集』をはじめとする張説の著作を読み、それを一つの規範として、自己の文学修業に心血を注ぎ、その結果、進士科・制科に相次いで及第したのである。自らの早世の故もあって、彼は結果として富貴に逢着することはなかったが、彼は、文学が士人の未来を保証し得なくなる時代の到来を予知し、文人宰相張説に対して、早急な世代交替を迫っているのである。

権貴を彈ることのない奔放な文章と、その中に込められた強烈な自負とにおいて、王泠然と任華はよく似通っている。「才を恃み物に驕る」と賈至を攻撃した任華の言葉は、

「公は物に傲るを以て、富貴にして人に驕り、相と為りて以来、一善を進め一賢を抜く能はず」と張説を詰る冷然の言葉とよく似ているし、冷然が高昌宇を「明公は欲を縦にし心を高くし、半面をも垂れず、豈に天下の（人の）公侯の浅深を窺ふを畏れざらんや」と罵る文句の中の「半面」「浅深」という言葉も、任華の「上蔽大夫賤」の中に全く同じ意味で用いられていた。「用人の柄」を握る権貴だけが、仕進を願う卑賤なる者たちを一方的に品評するのではなく、選ばれる側の卑賤の者たちも、対等に権貴の「浅深」を見つめ評価するのだという意識を、彼らはともに抱いているのである。王冷然が高昌宇に向かって、「君は是れ御史なり、僕は是れ詞人なり。貴賤の間、君と隔濶すと雖も、文章の道は、亦た調ふに同声ならん。富貴を以て人に驕るべからず、礼義を以て隔てらるるべからず」と語りかける。文章の道を追求する共通の情熱によって結ばれる人間関係こそが、「党」であり「媒」であると冷然は言うのである。任華にはこのような明確な発言はないが、「文章」を共通の尺度とし貴賤を超越した中に、真の「知己」が、そして「良媒」が存在すると彼が信じていることは確かである。

『唐音癸籤』卷二十八に、「明皇雜錄云、天宝末、劉希夷・王冷然・王昌齡・祖詠・張若虛・張子容・孟浩然・常建

・李白・劉昶・崔曙・杜甫、雖有文章盛名、皆流落不偶。」⁽⁸⁾と言う。また、同書卷二十八に、「開元以前、詞人鮮弗達者、天宝以後、才子鮮弗窮者。」と言う。詩人才子の文学的盛名が榮達に結びつかなくなる時代を天宝年間とする見解である。文学が富貴・榮達と結びつかなくなる時代の、入り口に差ししかかるあたりに王冷然が位置し、その流れがすっかり定着した中で任華は生きた。唐の建国から百年を経た王冷然の時代、富貴を保証するという文学の功利性は、張説を最後の光芒として終熄に向かいつつあった。官場からの張説の引退と自己の官場への登場を要求する王冷然は、富貴という頂きに到達するために研鑽を重ねて来た自己の文学が無力化する、その時代の到来を予感していたのかも知れなかった。

任華の時代、優れた文学こそが富貴を保証するという文人暗黙の常識はすっかり変質してしまっていた。かつて天宝六載（七四七）、任華はあこがれの大詩人李白に詩を贈り、雄渾な彼の詩文と奔放不羈な生き方に満腔の敬意を表した。時に李白は四十七歳、翰林院に召された栄光ある経歴を持つ完成された詩人であり、おそらく二十歳代の青年であった任華は、自己の未来を重ね合わせつつ、李白の詩文と生き方とをまばゆげに見つめていたはずである。その

李白が流落不遇のうちに世を去った宝應元年（七六一）から一・二年後、任華は成都に地を避けていた杜甫に詩を贈った。彼は、杜甫がかつて長安で並ぶ者のない詩名を誇ったことを讃え、いま蜀地に客居する杜甫の身を氣遣ったのち、相変らずうだつのあがない自己の近況を、

而我不飛不鳴亦何以　而して我は飛ばず鳴かず亦た

何の以ぞ

只待朝廷有知己

只だ朝廷に知己あるを待つのみ

已曾讀却無限書

すでに曾に読却せり無限の書

拙詩一句兩句在人耳

拙詩の一句兩句は人の耳に在

らんに

如今看之總無益

い^ま今これを看るに総て益なし

又不能崎嶇傍朝市

また崎嶇して朝市に傍る能はず

と報告している（「雜言寄杜拾遺」詩）。

任華は、あの大詩人李白が流離のうちに世を去ったことも、また、かつて長安に盛名を誇った杜甫が、今は成都で旅寓の日を過ごしていることも知っている。そして現在の自分はと言えば、いささか詩名が人に知られるようににはなつたが、朝廷の有力者の「知己」に恵まれず、「飛ばず鳴かず」のありさま、彼は杜甫に向かって、これまで心血を注いで来た自己の文学を「総て益なし」と訴える。あたか

も、盛名を有しながら流寓の日々を成都に過ごす杜甫と、文学無力の嘆きを共有しているかのようである。また、杜甫は、成都を去つてのち、大暦五年（七七〇）冬に漂泊の生涯を閉じるが、先述した任華の四篇の上書が、すべて杜甫の成都逗留から死を迎える期間に書かれているのも、偶然とは言え興味深い。任華が心から敬意を払ってきた杜甫の文学が、天地を驚動させんばかりの高い完成度に達しながら、杜甫自身はおよそ富貴とは無縁の湖南の船中で生涯を終えた。李白を、そして杜甫を頂点とする詩人たちの不遇を知る任華は、文学と富貴との乖離が確実に定着した時代に自分が生きることが痛烈に感じているのである。

このように見てくると、王泠然、そして任華へと続く、権貴に対する常軌を逸したかのごとき上書は、「仕進に急なり」⁽⁹⁾、「其れ亦た狂狷の流か」というような、彼らの個人的資質にのみ帰結させて済ませるわけにはいかなくなる。彼らの怒りの上書は、文学無力の時代の到来に対する、詩人たちの憤りを代弁するものでもあったのである。

おわりに

詩人の富貴・栄達の基盤となるはずの文学が無力化した

としても、詩人たちは文学を抛棄することはない。晩年の李白や杜甫が世俗の富貴を関心の埒外に置いたのち、ますます詩文への情熱をかきたてたように。窮愁・流離の不幸な境遇は、むしろ偉大な文学の誕生を促す陣痛ともなるのである。

わかつているだけでも嚴武・賈至・杜濟・庾準という四人の権貴に対して、「知己」「良媒」たることを求めて体当りした任華は、結局、自負する文学を買われて栄達の道を歩むことはなかったが、のち、桂州刺史・桂管防禦觀察使李昌巖の幕佐として桂林に滞在した彼は、およそ富貴・栄達には縁のない辺境において、詩人としての輝く眼を示した。それは桂林の風光への耽溺であり、詩人の目による桂林の美の発見であった。⁽¹⁰⁾ 彼は言う。

碧峯は巉巖として、柏梢より出で、虎牙の如くして、天を夾みて立つ有り。加へて以て白日は落ちんと欲し、挂かりて巖の半ばに在り、横さまに灘水を照らして、月は微明を帯ぶ。⁽¹¹⁾〔送李審秀才帰湖南序〕

巖嵒たる群峯、青石より疊出し、逶迤たる秋水、下に碧沙を蔵す。⁽¹²⁾〔送溫司馬進降誕方物序〕

霜天 掃ふが如く、低れて朱崖に向かふ。加へて以て尖山万重、平地に卓立す。黒は是れ鉄色、鋭きこと筆鋒

の如し。復た陽江・桂江の、軍城を略りて南走し、滄海に噴り入り、横りて三山を浸す有り。⁽¹³⁾〔送宗判官帰滑台序〕

これらはすべて送別の宴中における描写であり、「此の邦の詞客、往来また多しと云ふ」〔送魏七秀才赴広州序〕という、詩人漂泊の思いを根底に蔵するのであるが、とりわけ最後に引いた河南の滑台県に帰る宗袞という親友を送る序は、「王事の故」の何万里にも及ぶ旅の果てに、会い、そして別れる詩人の苦難の宿命を、桂林の絶景を背に描く佳作である。引用部分に続けて、彼は、

則ち中朝の群公、豈に遐荒の外に、是の如き山水あるを知らんや。山水既に爾り、人亦た其れ然り。袞よ此に對して、我と手を分かつ。我を忘るるは尚ほ可なり。豈に此の山水を忘るるを得んや。

と述べてこの序を締めくくっている。「中朝の群公」云々達関しては、これまで任華がひたすら中朝における栄達を目指していたことからすれば、負け惜しみにも似た屈折した心理を読み取ることも可能かも知れない。しかし、中朝の群公は桂林の山水の美を知ることができないだけでなく、その絶景の中で出会い別れる親友の心情をも知ることができないのだ、と彼は続ける。「私を忘れても構わない

が、この桂林の山水を忘れないでほしい」という宗衮への言葉は、万感を込めた詩人の心から出るのである。任華は中朝に居並ぶ群公の一人にはなれなかったが、一方ではそれを超えた価値あるものを擲んだとも言えるのである。

注

(1) 『全唐詩』卷二六一「任華」小伝に「其亦狂狷之流歟。」とある。

(2) 任華については、岩波新書『李白』（アース・ウェイル著、小川環樹・栗山稔訳、一九七三年一月）第九章、ならびに補注・訳注に、かなりまとまった記述がある。また、任華の作品の制作年代、および、彼が李白に贈った「雜言贈李白」詩、ならびに、彼が杜甫に贈った「雜言贈杜拾遺」詩に関しては、拙稿「任華における李白・杜甫」（『人文論究』第五十三号、北海道教育大学函館人文学会、一九九二年三月）を参照されたい。本稿には、該稿における論証をもとにして記述する部分がある。

(3) 賈至の事跡については、傅璇琮『唐代詩人叢考』（中華書局、一九八〇年一〇月）「賈至考」に詳しい。

(4) 任華の「懷素上人草書歌」については、拙稿「懷素上人草書歌をめぐって」（『語学文学』第三十号、北海道教育大学語学文学会、一九九二年三月）の中で言及している。

(5) 『唐詩紀事』卷二十二「任華」の条に、高適が任華に贈った詩を載せる。それは次の通り。

「丈夫結交須結貧、貧者結交交始親、世人不解結交者、唯重金不重人、黃金雖多有盡時、結交一成無竭期、君不見管仲與鮑叔、至今留名名不移。」

金錢などによって左右されない男と男の強烈な友情が詠じられるが、おそらく任華の生き方に共鳴しての詩であろう。高適もまた、剛直な交情を重んじた人である。

(6) 傅璇琮主編『唐才子伝校箋』第一冊（中華書局、一九八七年五月）一八〇頁。

(7) 『唐摭言』卷六「公薦」に収録される。

(8) ここに「劉希夷・王泠然」等の名が出るのは正しくないが、そうした伝承があったのであろう。また、『開元天寶遺事十種』（上海古籍出版社、一九八五年一月）に収められる『明皇雜錄』の「補遺」では、「天寶中、劉希夷・王昌齡・祖詠・張若虛・孟浩然・常建・李白・杜甫、唯有文名、俱流落不偶、恃才浮誕而然也。」とある。王泠然はじめ、数名が欠けている。

(9) 『全唐詩』卷一一五「王泠然」小伝に「急於仕進」と記される。

(10) 中野美代子『龍の住むランドスケープ』（福武書店、一九九一年十月）二二七頁「桂林発見史」に、桂林の風景を、望郷の念をかきたてるものとしてではなく「そのまま『奇峰』として詠んだのは、玄宗朝の張九齡が最初である」とある。韶州曲江の人である張九齡とは違い、任華に望郷の念のなかるうはずはないが、送別の席で、桂林の美景を去り行く人に強く焼きつけようとする彼の描写はみごとである。（北海道教育大学）